

『阿闍仏国経』と小品般若経の関係

——阿闍仏に関する箇所を中心として——

金子 大 輔

はじめに

支婁迦讖訳『阿闍仏国経』¹⁾ (以下『阿闍』) は紀元前後の成立と考えられており、阿闍仏やその仏国土を主題とした経典である。また阿闍仏は同じく支婁迦讖訳の『道行般若経』をはじめとする小品般若経²⁾ においても言及され³⁾、経典編纂の背景には非常に近似した現在他方仏思想がうかがえる。そこで、阿闍仏に言及する〈恒伽提婆品〉、〈称揚菩薩品〉⁴⁾ といった諸品における教説が、『阿闍』の教説とどのような関係にあるかを調査し、両経の阿闍仏思想の背景を検討する必要がある。

阿闍仏国経と小品般若経では阿闍仏に諸菩薩の模範という共通の役割を与えている。それを示す小品般若経の記事には、同様の役割を与えられ阿闍仏と寶幢 (Ratnaketu) が併記されるが、小品般若経諸本で記述が相違している。本稿ではこれに注目し、形式別に分類して阿闍仏国経諸訳との比較を行った。これによると『阿闍』は、従来言われてきた小品般若経の中でも成立時期・訳出年代 (訳者) を同じくする『道行』よりも、訳出年代の遅れる『小品』、『仏母』などに近い形式を有することが指摘できる。またこの共通点は阿闍仏国経諸訳の中でも『阿闍』のみに言えることで、訳出年代の下る『大宝積経』「不動如来会」や蔵訳では阿闍と寶幢の記述について小品般若経諸本とは異なる形式を有している。

1. 寶幢に対する位置付け—小品般若経諸本の比較と分類

1-1. 十方諸仏に讃歎される菩薩の模範としての寶幢

『阿闍』では「発意受慧品第一」の冒頭に過去の諸菩薩の所行を学び奉行すれば、無上正真道を成就できると説かれており⁵⁾、これを契機として阿闍の発心から正覚成就までが説かれている。つまり諸菩薩の模範たる「過去に菩薩道を求めた者」の一人として阿闍とその道行が説かれているのである。これは阿闍仏国経諸訳間

で一致している。

小品般若経でも阿闍仏は諸菩薩の模範として説かれている。『小品』「称揚菩薩品第二十三」では十方諸仏に讃歎される菩薩として、阿闍仏の菩薩時代の所行、及び寶幢菩薩（『小品』では寶相菩薩）の所行に随う菩薩が讃歎されると説かれている。

『小品』「称揚菩薩品第二十三」

是能隨學阿闍佛為菩薩時所行道者。如是菩薩雖未得阿毘跋致。亦為諸佛稱揚讃歎。須菩提。有能隨學寶相菩薩所行道者。如是菩薩雖未得阿毘跋致。亦為諸佛稱揚讃歎。 (T.8,p.576c)

諸菩薩の模範という阿闍仏の位置付けは小品般若経諸本で一致していることから、小品般若経に阿闍仏への言及箇所が付加された時点で、阿闍仏の役割は確定していたと考えられる⁶⁾。上掲の『小品』の経文では阿闍仏と共に寶幢菩薩が説かれているが、『道行』の相当箇所では阿闍仏と共に寶幢仏が説かれている。

『道行』「強弱品第二十四」

有菩薩隨阿闍佛前世為菩薩時所行。及羅麟那杖那佛前世為菩薩時所行。有菩薩隨是教。用是故。十方諸佛讚是菩薩。 (T.8,p.467c)

この箇所における阿闍と寶幢の記述の形式によって、小品般若経諸本を分類すると以下の通りである。

- ・阿闍仏、寶幢仏への隨學を説く → 『道行』、『大明度』
- ・阿闍仏、寶幢菩薩への隨學を説く → 『小品』、『第四分』、『仏母』、藏訳、梵本

『道行』、『大明度』では阿闍仏と寶幢仏は「前世為菩薩時」と表現されており、すでに仏となった存在として意識されていることが確認できる。

1-2. 釈尊が讃嘆する菩薩としての寶幢

前述と同じ〈称揚菩薩品〉には、釈尊も十方諸仏と同様に菩薩を讃嘆することが説かれている。ここは釈尊が讃嘆する菩薩を挙げる箇所であるから、諸本全てにおいて阿闍仏を挙げることはない。しかし寶幢についてはここでも『道行』と『大明度』は寶幢仏を説き、それ以外では寶幢菩薩を説くという相違がみられる。

『道行』

譬若我今讃歎說羅麟那杖那佛。 (T.8,p.467c)

『小品』

譬如我今稱揚讃歎寶相菩薩。說其名字。及餘菩薩。於阿闍佛所。修行梵行。不離是般若波羅蜜行者。 (T.8,p.576c)

釈尊によって讃歎される菩薩を説く形式を諸本で分類すると以下の通りであ

(170) 『阿闍伽国経』と小品般若経の関係 (金子)

る⁷⁾。

A 寶幢仏 → 『道行』, 『大明度』

B 寶幢菩薩, 阿闍伽刹中の諸菩薩 → 『小品』, 『第四分』, 『仏母』

C ラトナケートウ菩薩, シキン菩薩, アクショービヤ刹中の諸菩薩 → 蔵訳, 梵本
蔵訳と梵本にはシキン菩薩が含まれる⁸⁾ ため別に分類したが, 寶幢を菩薩とする点では B・C は同じである。寶幢菩薩を挙げる B・C は A と比較すると, 阿闍伽国の諸菩薩も讃歎の対象に加えられており, また B の『仏母』には「阿闍伽刹中の寶幢菩薩」とあることから, B・C では, 寶幢は阿闍伽仏のもとで修行する菩薩の一人として位置付けられたと考えられる。

寶幢は小品般若経では上掲の二箇所名称が記されるのみであり, その性格はこれ以上は不明であるが, 『大智度論』によれば, 寶幢菩薩は諸仏に讃歎されるような菩薩として, 般若経においてはじめて説示されたと説かれている⁹⁾。

2. 阿闍伽国経における寶幢菩薩の位置付け

阿闍伽国経諸訳にも寶幢菩薩¹⁰⁾ に言及する箇所があり, 小品般若経とは異なった役割を担っている。まず『阿闍』では, 阿闍菩薩の行の堅きことが説かれる中に, 寶幢菩薩が阿闍菩薩に随って学行すると説かれている¹¹⁾。これに対して『大宝積経』「不動如来会」では「寶幢菩薩所修之行。比於不動菩薩。於少分中乃至歌羅分亦不及一」(T.11, p.104a) と説かれ, 寶幢菩薩が阿闍菩薩に随学するとは説かれず, 寶幢菩薩は阿闍菩薩を称揚するための比較対象としてのみ説かれている。蔵訳は「不動如来会」に一致する¹²⁾。

小品般若経では阿闍仏と寶幢が諸菩薩の模範であり称揚されていたのに対し, 『阿闍』では寶幢菩薩が阿闍菩薩に随学していることが分かる程度であり, さらに異訳二本では明らかに阿闍菩薩のみが称えられている。また, 阿闍伽国経諸本では寶幢は菩薩であって仏ではなく, 授記が説かれることもない。したがって阿闍仏と寶幢の関係において『道行』, 『大明度』とは立場を異にする。

おわりに

小品般若経諸本を阿闍と寶幢の関係から比較分類すると次のようになる。

A 阿闍仏と寶幢仏を説く → 『道行』, 『大明度』

B 阿闍仏と寶幢菩薩 (及び阿闍伽国の諸菩薩) を説く → 『小品』, 『第四分』, 『仏母』

C 阿闍仏と寶幢菩薩と尸棄菩薩 (及び阿闍伽国の諸菩薩) を説く → 蔵訳, 梵本

Aにおいては、一方で寶幢仏が諸菩薩の模範として説かれ、他方では釈尊に讃歎される「菩薩」として説かれ、現在仏たる阿闍に比して寶幢は位置付けが定まっていない。

これに対してB・Cにおいては、阿闍は仏、寶幢は菩薩という位置付けに定まっている。前述の通り、寶幢菩薩は阿闍仏国に住して阿闍仏に隨学していると位置付けられた可能性が高いのである。この場合BやCにおいてもし「寶幢仏」とするならば一世界一時に二仏が住していることとなるため、寶幢は菩薩でなければならなかったと考えられる。

以上の点から、寶幢菩薩が阿闍菩薩の隨学者であると位置付けられ、また尸棄菩薩に言及していない『阿闍』はBにもっとも近い。したがって支婁迦讖の時代には、諸菩薩の模範という阿闍仏の共通基盤の上に、寶幢仏を説く『道行』の立場と、寶幢菩薩を説く『阿闍』の立場があり、阿闍仏思想に少なくとも二つの立場があったことが指摘できる。さらに「不動如来会」や藏訳については、小品般若経のいずれとも異なる形式を有しており、この箇所における小品般若経との影響関係はみられない。

小品般若経のA・B・Cの違いは変遷によるものか系統によるものかは不明である。それはA・B・Cに対応する形式が他の経論にみられるからである。他方仏として阿闍と寶幢を同列に扱う形式¹³⁾、阿闍仏と寶幢菩薩を師弟関係において捉える形式¹⁴⁾、或は「不動如来会」などのように阿闍のみを讃歎する形式などがある¹⁵⁾。この他、釈尊の会座の菩薩衆の名前を列举する中にのみ寶幢菩薩の名称を説く経典も多い。今後、阿闍仏に関する記事の系譜を検討するための一つの手がかりとなる。

【略号】

・T.:『大正新脩大藏経』 ・Pek.:『影印北京版西藏大藏経』 ・Vaidya.:P.L.Vaidya,ed. [1960]
Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, Buddhist Sanskrit Texts No.4, Darbhanga

- 1)『阿闍仏国経』二卷 支婁迦讖訳 (No.313),『大宝積経』「不動如来会」二卷 菩提流志訳 (No.310-6), *'Phags pa de bshin gshegs pa mi 'khrugs pa'i bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*. Jinamitra, Surendrabodhi, Ye šes sde 訳 Pek.22, pp.128-160 (Dsi, 1a-80a) (No.760-6) 2)『道行般若経』支婁迦讖訳 (No.224) (以下『道行』),『大明度無極経』支謙訳 (No.225) (以下『大明度』),『摩訶般若波羅蜜鈔経』竺法護訳 (No.226),『小品般若波羅蜜経』鳩摩羅什訳 (No.227) (以下『小品』),『大般若波羅蜜多経』第四分 玄奘訳 (No.220) (以下『第四分』),『大般若波羅蜜多経』第五分 玄奘訳 (No.220),『仏母

(172) 『阿闍仏国経』と小品般若経の関係 (金 子)

出生三法蔵般若波羅蜜多経』施護訳 (No.228) (以下『仏母』), 梵本: *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (P.L.Vaidya, ed. [1960] *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts No.4, Darbhanga), 蔵訳: *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*, Śākyasena, Jñānasiddhi, Dharmatāśīla 訳 (Pek. No.734) 3) 静谷正雄 [1974] 『初期大乘仏教の成立過程』百華苑 pp.103-117, pp.246-258 4) 小品般若経諸本における総称として『小品般若経』の品名を採用した. 5) T.11, p.751c 6) この他「恒伽提婆品第十八」では, 恒伽提婆という女人への授記の中で, 恒伽提婆は初めに阿闍仏国に往生し阿闍仏に師事するとされていることから, 阿闍仏の師仏としての役割がうかがえる (T.8, p.568b). 7) 『大明度』(T.8, p.502a), 『第四分』(T.7, p.853a), 『仏母』(T.8, p.662c), 蔵訳 (Pek.21, Mi263a-b), 梵本 (Vaidya.p.222) 8) 椎尾辨匡氏は過去仏のシキンを由来として阿闍仏が現れたと指摘しておられる. ここでは阿闍仏とは別にシキン菩薩が説かれており, 椎尾氏の指摘とは異なるが, シキン仏と阿闍仏思想の関わりを検討する一つの視点となる. 本稿では阿闍仏国経にシキン菩薩が現れないことからこの点には立ち入らず期を改めて検討することとする. ([1933] 『仏教経典概説』甲子社書房 pp.601-602) 9) 『大智度論』(T.25, p.615a). 小品般若経の相当箇所 (『放光般若経』(No.221) T.8, p.103c, 『大品般若経』(No.223) T.8, p.361a など) は寶幢菩薩と尸棄菩薩を説いており C に分類される. 10) 『阿闍』では「寶英菩薩」となっているが, 異訳では寶幢 (rin po che'i tog) 菩薩となっている. 寶幢 (Ratnaketu) の ketu 「印, 旗」の意に「(矛先に付ける) はなかざり」の意を持つ「英」をあてたと考えられる. 11) 如阿闍菩薩摩訶薩所被僧那僧涅. 寶英菩薩摩訶薩亦從阿闍菩薩學行. 舍利弗. 無央數菩薩. 不能及知阿闍菩薩所被僧那僧涅甚堅. (T.11, p.754b) 12) Pek.21, Mi, 19b 13) 『阿弥陀経』(T.12, p.347b), 『十住毘婆沙論』(T.26, p.43a), 『金光明経』(T.16, p.335b) など 14) 『悲華経』(T.3, pp.193c-196c) 15) チベットのゲルク派の僧侶であるチョネ・ダクパシェードゥブによる阿闍仏国経の要約 (*rGyal ba mi 'khrugs pa'i zhing bkod* (*Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum* 44, 1a-8a, pp.108-111 (dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs 天津古籍出版社)) では, 寶幢菩薩は言及されずただ阿闍菩薩が称揚されるのみである. (藤仲孝司氏・中御門敬教氏 [2007] 「阿闍仏に関するチョネ・ダクパシェードゥブの信仰と実践—東西二つの浄土とそこへの往生について—」『仏教大学総合研究所紀要』第 14 号))

〈キーワード〉 阿闍仏国経, 小品般若経, 阿闍仏, 寶幢, Akṣobhya, Ratnaketu

(龍谷大学大学院研究生)